慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	オーギュスト・ブランキにおける革命の主体 : 「デクラセ」概念の再検討
Sub Title	Sur le sujet de la révolution chez Auguste Blanqui : le réexamen du concept des déclassés
Author	高草木, 光一
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1984
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.77, No.4 (1984. 10) ,p.547(73)- 562(88)
JaLC DOI	10.14991/001.19841001-0073
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19841001-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オーギュスト・ブランキにおける革命の主体

——「デクラセ」概念の再検討——

高草木　光　一

目　次

はじめに
第一節　「労働者の共和国」の理念——人民主権から階級闘争へ——
第二節　歴史観にみる革命の構図——共産主義と教育——
第三節　政治革命優位の論理——社会革命批判をめぐって——
第四節　革命の主体——「デクラセ」概念の再検討——

はじめに

近代フランスに輩出した様々な社会主義思想家の中にあって，オーギュスト・ブランキ（Louis Auguste Blanqui, 1805-1881）は，これまで低い位置しか与えられず，その思想に関する研究成果も相対的に乏しいまま今日に至っている(1)。たしかに，ブランキは体系的な著作を持たぬ行動の人では

注（1）ブランキ研究に関する主要文献を次に掲げる。Charles Da Costa, *Les Blanquistes,* (Paris, 1912). Suzanne Wassermann, *Les clubs de Barbès et de Blanqui en 1848,* (Paris, 1913, réimp. Genève, 1978). Alexandre Zévaès, *Auguste Blanqui,* (Paris, 1920). Maurice Dommanget, *Blanqui,* (Paris, 1924, nouv. éd. 1970). Gustave Geffroy, *L'enfermé,* 2 vols., (Paris, 1926), 野沢協・加藤節子訳『幽閉者——ブランキ伝——』(現代思潮社, 1973年)。Edward S. Mason, "Blanqui and Communism," *Political Science Quarterly,* Vol. 44, No. 4, 1929. A. Zévaès, *Une révolution manquée: l'insurrection du 12 mai 1839,* (Paris, 1933). M. Dommanget, *Blanqui à Belle-Ile,* (Paris, 1935). Id., *Blanqui: La guerre de 1870-71 et La Commune,* (Paris, 1947). Sylvain Molinier, *Blanqui,* (Paris, 1948), 栗田勇訳『コンミューンの炬火——ブランキとプルードン——』(現代思潮社, 1963年) 所収。M. Dommanget, *Un drame politique en 1848: Blanqui et le document Taschereau,* (Paris, 1948). Id., *Les idées politiques et sociales d'Auguste Blanqui,* (Paris, 1957). Alan B. Spitzer, *The Revolutionary Theories of Louis Auguste Blanqui,* (New York, 1957). M. Dommanget, *Blanqui et l'opposition révolutionnaire à la fin du second Empire,* (Paris, 1960). Id., *Auguste Blanqui: des origines à la révolution de 1848,* (Paris, 1969). Id., *Auguste Blanqui: au début de la IIIe république (1871-1880),* (Paris, 1970). Samuel Bernstein, *Auguste Blanqui and the Art of Insurrection,* (London, 1971), V. P. Volguine,"Les idées politiques et sociales de Blanqui," dans Auguste Blanqui, *Textes choisis,* (Paris, 1971). M. Dommanget, *Auguste Blanqui et la révolution de 1848,* (Paris, 1972). Alain Decaux, *Blanqui l'insurgé,* (Paris, 1976). Arno Münster, "Introduction" de Louis Auguste Blanqui *Oeuvres complètes,* t. 1, (Paris, 1977). Tony Denholm, "Louis Auguste Blanqui: the Hamlet of Revolutionary Socialism ?" in Eugene Kamenka and F. B. Smith (eds.), *Intellectuals and Revolution: Socialism and the Experience of 1848,* (London, 1979). Patrick H. Hutton, *The Cult of the Revolutionary Tradition: The Blanquists in French Politics, 1864-1893,* (Berkeley,1981).

あったが，こうした評価の低さは，エンゲルスのブランキ批判に端を発するものである。エンゲルスは，「ブランキ派コミューン亡命者の綱領」(1874年) の中で，ブランキの革命思想の本質を「革命的少数者の急襲」とそれにつづく「少数者の独裁」と把握し，ブランキをマルクス主義によって超克された「過去の世代の革命家」と断定している(2)。以後の諸研究が，このエンゲルスの評価を洗い直すいくつかの視角を提示してきたとはいえ，とりわけわが国においては，その影響は未だに根強いものがある。このことは，ブランキにおける革命の主体である「デクラセ (déclassés)」が，ブルジョワ階級からの「階級落伍者」と訳され，またそう解釈されてきたことに多くを依っていると思われる。つまり，「デクラセ」が，労働者階級の立場に立つ一部のブルジョワ知識人と解釈される限り，エンゲルス以来の「少数者の革命」という認識は，根底から覆されることはないのである。

本稿(3)は，この「デクラセ」概念を再検討することによって，ブランキの革命思想を新たな視座の下に置くことを目的とするものである。「デクラセ」がブランキの革命思想を理解する上での鍵概念である以上，その再検討は，当然，彼の革命思想全体との関連の中でなされるべきものである。それゆえ，本稿は，ブランキ自身が整理した諸論考にその他の草稿を付け加えて死後公刊された主著『社会批判』(4)を主たる分析の対象としつつ，第一節から第三節までを，「革命の主体」という主題に沿ってブランキの革命思想を整理することに充てている。第一節では，彼が「労働者の共和国」という理念を獲得するに至る思想形成過程を跡づけ，第二節では，その「労働者の共和国」を担う者の条件を彼の歴史観のうちに探る。第三節では，かかる彼の革命思想をフランス社会主義総体の中に位置づけ，その独自性を考察する。そして，以上を踏まえて，第四節（最終節）で，「デクラセ」をテクストそのものに即して分析し，その新たな解釈を提示する。

わが国における研究では，以下のものが挙げられる。平井新「ブランキの階級闘争説とプロレタリア独裁説」(『三田学会雑誌』第25巻第2号，1931年)。対馬忠行『ブランキ主義とマルクス主義』(弘文堂，1950年)。平井新「ブランキに関する断片」(『三田学会雑誌』第54巻第3号，1961年)。柴田朝子「十九世紀フランスの革命思想――オーギュスト・ブランキを中心として――」(岩間徹編『変革期の社会』御茶の水書房，1962年，所収)。加藤晴康「解説」(ブランキ『革命論集』下巻，現代思潮社，1968年，所収)。伊藤満智子「オーギュスト・ブランキと七月王政期の共和派運動」(『歴史学研究』第363号，1970年)。石塚正英『叛徒と革命――ブランキ・ヴァイトリンク・ノート――』(イザラ書房，1975年)。野地洋行「フランス社会主義の諸潮流――社会主義における政治と経済――」第6節（平田清明編『社会思想史』青林書院新社，1979年，所収)。岩本勲『＜増補＞フランスにおける革命思想――社会主義と独裁の伝統――』(晃洋書房，1980年) 第3章1。関嘉彦『社会主義の歴史 I ――フランス革命から十九世紀末へ――』(力富書房，1984年) 第4章第1節。

注（2） Friedrich Engels, "Programm der blanquistischen Kommuneflüchtlinge," *Marx-Engels Werke*, Bd. 18, (Berlin, 1962), S. 529. 土屋保男訳『マルクス・エンゲルス全集』第18巻（大月書店，1967年)，522頁。

（3） 本稿は，慶應義塾大学経済学修士論文「オーギュスト・ブランキの革命思想――その生成と構造――」(1982年3月) を基礎にしている。修士論文では，七月王政期の社会経済構造，労働者階級の一般的状態，政治運動と労働運動のあり方との関連の中で，ブランキの革命思想の生成について詳述したが，本稿では「革命の主体」に論点を絞ったため，その「生成」に関わる諸論点は大幅に割愛されている。

（4） Auguste Blanqui, *Critique Sociale*, 2 vols., (Paris, 1885). (以下，*C. S.* と略記する。)

第一節 「労働者の共和国」の理念——人民主権から階級闘争へ——

ブランキの革命思想は，七月王政期に形成され，二月革命の経験によって確立されたと見ることができる。[5] 七月革命直後，共和主義結社「人民の友協会 (Société des Amis du Peuple)」に，つづいて「人権協会 (Société des Droits de l'Homme et du Citoyen)」に参加し，人民主権という政治原理によって基礎づけられた彼の思想は，二月革命の経験によって，決定的に，「資本」対「労働」の階級闘争の理念へ，政治原理の対立の基底にある社会関係の変革の理念へと深化した。これは，ブランキが革命家としての自己を確立してゆく過程であると同時に，社会変革の主体の模索の過程でもあった。共和主義者として，というよりは，共和主義運動の担い手として出発したという経歴は，社会変革を机上の理念ではなく現実の運動として展望するという視角を彼に与えた。サン-シモン主義者やフーリエ主義者等社会主義者と呼ばれる人々が，この時期の政治運動や労働運動との現実的接点を欠いていたのに対して，共和主義運動の中に身を投じ，自らの行動と経験の中から理念を築き上げる革命家ブランキにあっては，誰が運動を担うのかという問題は突きつけられた現実的課題だった。王政初期の共和派は，雑多な分子の集合であったにせよ，[6] 1831年のリヨン蜂起以降急進化する労働運動と連帯し，王政に対抗しうる唯一の革新勢力だった。そして，「労働者的かつ共和主義的フランスが，十九世紀の歴史においてごくまれな友愛の瞬間のひとつを経験した」[7]と言われる1833年の労働運動と共和主義運動の紐帯を，1834年の「結社禁止法」，35年の「九月法」と相次ぐ弾圧政策下で，地下活動，秘密結社という形態で継承していったのが，他ならぬブランキの「四季協会 (Société des Saisons)」であった。[8]「四季協会」は，一般に，1839年5月の叛乱によってブランキの粗野な一揆主義を象徴するものとして語られているが，その会員構成に着目し，10の「季節」が職種別に編成されていること，また，仕立工，製靴工，大工等当時の労働運動を担うパリの熟練労働者層が中核となっていること[9]を見れば，「四季協会」が，弾圧政策下における共和主義運動の労働運動包摂のひとつのあり方であったと考えることができる。

では，ブランキにとって主体の概念はどのように形成されていったのだろうか。以下，共和主義から社会主義[10]へという彼自身の思想の歩みの中でその形成過程を具体的に追ってみることにしよう。

注 (5) cf. Volguine, *op. cit.*, p. 7.

(6) cf. Georges Lefranc, *Les gauches en France: 1789-1972*, (Paris, 1973), pp. 105-106.

(7) Édouard Dolléans, *Histoire du mouvement ouvrier: 1830-1871*, (Paris, 1957), p. 80. なお，この時期の労働運動のあり方については，次に詳しく分析されている。Alain Faure, Mouvements populaires et mouvement ouvrier à Paris (1830-1834), *Le mouvement social*, No. 88, 1974.

(8) 共和派の中でブランキが果たした役割については，伊藤，前掲論文，参照。

(9) cf. Le document Taschereau, cité par Dommanget, *Un drame politique en 1848: Blanqui et le document Taschereau*, pp. 237-238.

(10) ブランキ自身，1848年の後は社会主義を標榜している。たとえば，"Lettre à Maillard (6 juin 1852)," *Oeuvres*

七月革命直後「人民の友協会」の一員であったブランキにとっては，政治原理としての人民主権それ自体が共和政であった。彼が自らをも含めたフランス三千万の人間を「プロレタリア」と呼び(11)，「富者と貧者の戦争(12)」を語ったとしても，明確な階級闘争の理念を保持していたわけではない。貧困は，社会関係によってではなく，政治によってもたらされるものと捉えられていた。したがって，社会問題の解決は，普通選挙の実現という問題に帰着する。「労働者が税に押しつぶされて死んでゆくのはリヨンだけではない，至るところでだ(13)」という発想は，「この改革（普通選挙実施）が達成されれば，富者のために貧者を身ぐるみ剝いでいる諸々の税はすみやかに廃止され，反対の基礎の上に成り立つ別のものにおきかえられるだろう(14)」という普通選挙万能論を導く。いま社会変革の主体という観点から見るならば，「プロレタリア」を政治的非特権者（選挙権無資格者），かつ経済的貧者と捉えるかぎり，新しい社会の建設者という認識はどこからも出てこない。彼らは社会の生産の担い手ではなく，抑圧された犠牲者であるにすぎない。七月革命時に書かれた「革命宣言草案(15)」には全人民武装蜂起のプランが記されており，また，「栄光の三日間」で果たしたパリ労働者の戦闘能力に対しては幾度か過度とも思われる評価がなされてはいるが(16)，ブランキがそこに見たのは，単に，現にあるものの破壊者としての能力にすぎなかったといえよう。

1848年2月においてもなお，ブランキは共和政への信奉を捨てたわけではなく，共和政を宣言した臨時政府に対して一応の支持を表明している。しかし，それは，反革命の危機を避けるという状況判断からの，そして普通選挙の無期限延期という条件付きでの承認だった。普通選挙が彼の共和政の必要条件だったとしても，その早期実施は，王党派の支配を再び復活させる可能性，あるいはブルジョワ共和政を不動のものにする可能性をもつだけだという判断である。ブランキは，普通選挙を実現するまでの期間の大衆啓蒙を自らの課題とし，その結社「中央共和協会（Société Républicaine Centrale）」は広く開かれた啓蒙機関として意識されたために，「とりわけ秘密結社のかつての会員によって構成されていた(17)」にも拘らず，統制化，組織化は行なわれなかった(18)。そして，その啓蒙はとりあえず無期限の普通選挙延期を必要としたのである。この要求が受け容れられないことが

---

complètes, t. 1, (Paris, 1977), pp. 351-366. を見よ。（この全集は，本稿作成時点で第2巻以降が刊行されていない。以下，この全集からの引用は，単に *O. C.* と略記する。）加藤晴康訳『革命論集』上巻，85～102頁。（なお，以下の訳文は必ずしも既訳によらない。）

注 (11) "Le procès des Quinze. Défense du citoyen Louis-Auguste Blanqui devant la Cour d'Assises (12 janvier 1832)," *O. C.*, p. 74. 訳，（上）9頁。

(12) *Ibid.*, p. 75. 訳，（上）10頁。

(13) *Ibid.*, p. 88. 訳，（上）24頁。

(14) *Ibid.*, p. 82. 訳，（上）18頁。（括弧内は引用者。以下同じ。）

(15) "Projet d'une proclamation révolutionnaire (Appel aux armes) (1830)," *O. C.* pp. 64-65.

(16) "Le procès des Quinze", *O. C.*, p. 90. 訳，（上）26頁。"Allocution devant la Société des Amis du Peuple (2 février 1832)," *O. C.*, p. 97. 訳，（上）31頁。

(17) Wassermann, *op. cit.*, p. 10.

(18) *Ibid.*, p. 31.

明白となったとき，ブランキは自らの共和政の内実を次のように語ることになる。「共和政が政府の一形態を他の形態と取り替えることにすぎないのなら，それは虚偽である。言葉を変えるだけでは十分ではない，事物を変えなければならない。共和政，それは労働者の解放であり，搾取の支配の終焉であり，『労働』を『資本』の横暴から解放する新しい秩序の到来である[19]」と。

ここで注目すべきことは，かつての特権者が「資本」として，非特権者＝貧者が「労働」として捉えかえされている点である。「労働」の解放という表現は，少なくとも，単なる犠牲者ではない，生産の主体としての労働者階級という理念を含意していると見てよいだろう。このような思想内容の推移は，基本的には，ブルジョワ共和政の成立という歴史的経験に依っている。しかし，その契機は，1834年創刊の『解放者（Libérateur)』紙準備期以来の経済学研究の中に見いだすことができる。

ここで，『社会批判』所収の経済学的論考を見ることにしよう[20]。むろんそれは，ブランキ自身が明言しているとおり，「経済学の専門的な概論ではなく，社会問題に関する一連の概観[21]」という種類のものであるが，ブランキの階級闘争の性格を，したがって革命における主体の問題を考察するうえでの基礎資料とはなりうるだろう。

ブランキは，バスティア（Frédéric Bastiat）等の経済学者を批判して次のように言う。「彼（経済学者）は，現にあるものに専心し，かくあらねばならぬこと，かくありうることにはほとんど関心を向けない。彼にとっては，正義，不正は意味のない言葉である。事実がすべてであり，権利はない。現実の体系が，彼には人間理性の至上の営為と見える[22]。」では，ブランキの言う正義とは何か。共和主義者として出発した彼は，フランス革命の諸理念，とりわけ平等のうちに正義を見る。この平等の政治的表現が人民主権であるとすれば，その経済的表現は等価交換原理であろう。ブランキは，「分業と貨幣の使用以来，交換は経済秩序の，したがって物質社会の大きな原動力である[23]」と捉え，「交換される対象の等価性[24]」の維持をもって現段階における正義と考える。すなわち，未来社会における「さらに完全な秩序が到来するまでは，公正な交換が諸国民の社会的・道徳的法である[25]」と。ブランキの社会批判の根幹は，本来この等価性の保障という役割を負うべき貨幣が，現実の経済社会においては逆に等価交換を破壊するものとして濫用されているという点にあった。

注 (19) "Aux clubs démocratiques de Paris (22 mars 1848)," *Textes choisis*, p. 116. 訳，(上) 68頁。(二重鉤括弧内は原文大文字。以下同じ。)

(20) ブランキが，これら一連の論考を著わしたのは，主として60年代以降のことであるが，その基礎となっているのは，30年代に書かれた「のちの集産主義理論家たちの先駆をなす」(Geffroy, *op. cit.*, t. I, p. 69. 訳，56頁) 経済学的論考である。

(21) *C. S.*, t. I, p. 1. 訳，(上) 123頁。

(22) *Ibid.*, t. I, p. 136.

(23), (24) *Ibid.*, t. I, p. 3.

(25) *Ibid.*, t. I, p. 157.

ブランキは論理的ないしは歴史的前提として単純商品生産社会を措定し，そこで各商品所有者が，商品をすべて売却し，獲得した貨幣のすべてで他者の商品を購入するという「公正な」交換が行なわれる限り，「資本」なるものはどこからも発生することはできないと考える[26]。つまり，彼にとって「資本」は「不公正な」交換の結果として認識され，経済学者たちの「蓄積された労働」に代えて，「抑圧された労働」，「盗まれた労働」という定義を「資本」に与えている[27]。

「資本」形成の契機は，まず消費の抑制，貯蓄によってもたらされる交換秩序の破壊であると捉えられる。ある者が貯蓄によって流通から貨幣を引き上げることは，他の商品所有者が商品を売り尽くすことができないことを意味するがゆえに，「貯蓄はペスト[28]」なのである。ブランキにとって「資本」は，まず第一に「流通から取り上げられ，貯め込まれた正貨[29]」であり，これは「労働と生産を減少させる」ゆえに，「抑圧された労働」と定義される。

こうして「労働権（*droit au travail*）」，すなわち「他人の労働生産物と絶えず交換しうる規則正しい労働の確保[30]」の権利を奪われた一群が形成されるが，いっぽう，貯蓄という行為はそれ自体としては目的とはなりえない。「人は利殖する（faire valoir）ためにのみ貯蓄する[31]。」この等価交換の破壊，高利こそが資本の本性であると彼は捉える。そして，ここに「資本」と「労働」への階級分化を見いだすのである。ブランキはこう主張する。「労働者は，生産物を作り出す間生きる必要がある。これは誰もが認める。生きるためには貨幣が必要である。彼にはそれがない。『貨幣閣下』は給与の名の下に，可能な限り少ない割当て（ration）を前貸しし，そうすることで，ずっと大きな価値をもつ生産物を奪いとる[32]。」「かくして一方では，資本は労働に新たな十分の一税を課す。これは，次に利殖する新たな蓄積の源泉である。他方では，賃労働者（salarié）は，この控除のために自分の生産物の等価物を購入することができず，困窮と苦悩の間を無限に往復する[33]。」つまり，「資本」は，「労働生産物に対する不当な天引き（prélèvement）[34]」であるがゆえに，「盗まれた労働」と定義されるのである。

資本を高利と定義し，産業資本による搾取をも高利の一形態と見る立場からは，資本主義を構造的に把握することはできないし，階級概念も「有閑者（oisif）」対「勤労者（travailleur）」というサン－シモン的概念との不分明な点を残している。S・バーンスタインの言うように，これは，「職人と小店主の視座を越えるものではない[35]」と言えるだろう。しかし，ブランキの思想形成期である七

注（26） *Ibid.*, t. I, pp. 9-38.
（27） *Ibid.*, t. I, pp. 62-63.
（28） *Ibid.*, t. I, p. 69.
（29） *Ibid.*, t. I, p. 71.
（30），（31） *Ibid.*, t. I, p. 72.（傍点は原文イタリック。以下同じ。）
（32） *Ibid.*, t. I, p. 107.
（33） *Ibid.*, t. I, pp. 72-73.
（34） *Ibid.*, t. I, p. 73.
（35） Bernstein, *op. cit.*, p. 355.

月王政期が「金融寡頭制」と呼ばれ，産業資本の未成熟な段階にあったこと，彼の視野の中心にあったパリの伝統的産業が1860年の英仏通商条約に至るまで厚い保護関税政策に護られて近代化を十分に推し進めることなく，パリ労働者は，パリ・コミューンに至るまで小作業場で働く半職人的な熟練労働者という過渡的な形態にあったこと(36)を考えれば，等価交換原理に立脚した高利批判というプルードンにも共通するこの視角は，経済学者ではなく革命家ブランキにとっては意味あるものとして受けとるべきだろう。つまり，ブランキは，フランス革命の理念から，不十分ながらも「資本」を正義によって批判する視点を獲得し，眼前の労働者に正義を見いだしたのである。これは，労働によって社会を担っている労働者が，「すべてのものの創造主」(37)である労働者が，政治の場においてもヘゲモニーを握らなければならないという階級闘争の宣言に他ならない。二月革命の時点で，ブランキは自らの共和政の内実が「労働者の共和国」であることを，生産の主体たる労働者がその共和国建設の主体であるべきことを，確認したのである。

第二節　歴史観にみる革命の構図——共産主義と教育——

階級闘争の理念を獲得し，主体としての労働者階級を見いだしたとしても，それは，ただちに現実の労働者階級がその実践の主体であることを意味するものではない。「すべてのものの創造主」であり正義を体現する労働者が主体としての意識をも獲得したときにはじめて，彼は真の主体となることができる。この労働者階級の存在と意識の問題がブランキの革命思想の基底にあり，したがってその歴史観をみることによって，彼の革命の構図そのものが浮かび上がってくるはずである。

ブランキの歴史観を語るとき，最も基本的な点は，彼が人間の歴史の中に見るものが，政治制度や社会関係の変遷である前に知の進歩だったということであろう。彼は歴史を個人主義から共産主義への移行の過程として捉えるが，それは知の漸進的な進歩，社交性と完成可能性という二重の属性(38)の開花によってもたらされる社会変革の過程であり，歴史の動因はあくまで脳髄の中に求められていた。歴史の端緒におかれた個人主義の社会とは，「皆殺し」の論理を内包するエゴイズムの社会であり，エゴイズムから全面的に解放された人間たちの社会，歴史の究極にある共産主義の社会とは「諸個人の尊敬，保証，安全」(39)を意味する社会である。エゴイズム批判という初期社会主義にほぼ共通して見られるテーマを，ブランキは歴史のうちに直接に読み込もうとしていたのである。

注 (36) 1847-48年度のパリ市商工会議所の調査によれば，「パリの産業は64,816名の企業主をかかえているが，小産業が支配的である。……というのは，7,117名の企業主だけが10名以上の労働者を使っているのに対して，32,583名は自分ひとりであるいはひとりの労働者と働いているからである。」(E. Levasseur, *Histoire des classes ouvrières et de l'industrie en France de 1789 à 1870*, t. II, (Paris, 1904), p. 211.)

(37) *C. S.* t. I, p. 128.

(38) *Ibid.*, t. I, p. 117.

(39) *Ibid.*, t. II, p. 70.

では，ブランキにとって，その時代はこの歩みのどこに位置づけられるのであろうか。分業，租税制度，会社，学校等あらゆる協同化，組織化の試みは「共産主義的革新」[40]であり，文明の進歩として一応の評価はされるものの，究極にある共産主義社会には程遠い段階である。依然として人間はエゴイズムと強欲に支配される「野蛮人」の域を脱しておらず，「（共産主義）思想は，最初の言葉をやっと発した」[41]段階にある。これが彼の基本的視座である。このような視座にあっては，「資本」は正義によって断罪されるべきものであったとしても，それがエゴイズムの化身であり，脳髄が歴史の動因である限り，それをうみ出し，それを許容している人間の意識そのものが変革されなければならないという結論が導かれる。意識が変革されない限り，「資本」は，いったん破滅させられたとしても「翌日にでも，その日の内にも再生するだろう」[42]からである。しかるに「脳髄の変化は一朝一夕になるものではない。それは数世紀にわたる事業である」[43]としたら，彼は諦観の中に身を置く他はない。長期的視野に立ったとき，社会悪の根絶という決意とこの諦観の間のディレンマがつねにブランキのうちにはある。

ただ，階級闘争を正義によって基礎づけ，主体としての労働者階級を見いだしたいま，「労働者の共和国」の建設は，少なくとも歴史を一歩前進させるものであることに疑問の余地はない。問題は彼らの意識のあり様である。彼らは「その災禍の源泉を知らない。」[44]「資本」を糾弾し，自らが社会変革の担い手となる意識を獲得してはいない。だとすれば，いま必要なことは，意識的主体を創出すること，労働者階級に階級意識を吹き込むことであろう。そして，その役割は教育が担う。ブランキは言う。「教育もまたひとつの力である。」[45]「ただ啓蒙の普及だけが抵抗に打ち勝ち，今日空想と思われているものを現実のものとするだろう。」[46]「共産主義は普遍化した教育の必然的結果であろう。」[47]「どんなに頭の悪い人間においても，ごまかしがどんな仮面を被っていようと，総合的な教育はそれに耐えるだけの十分な防備具となるだろう。」[48]

意識的主体の創出のための教育は，二つの内容をもつだろう。ひとつは，ここに言う「総合的な教育」である。これは，ブランキが「聖職者と資本の同盟」[49]と呼んだ「ファルー（Falloux）法」（1850年）下の教育政策への現実的批判という側面をももっている。この法律は，義務制，無償制の規定を設けず，初等教育の教育内容の第一に教理問答を置き，第二帝政期をも貫徹して「共和主義的・

注（40） *Ibid.*, t. I, p. 174. 訳，（上）135頁。
（41） *Ibid.* 訳，（上）136頁。
（42） *Ibid.*, t. II, p. 39.
（43） *Ibid.*, t. II, pp. 72-73.
（44） *Ibid.*, t. II, p. 122. 訳，（上）45頁。
（45） *Ibid.*, t. I, p. 137.
（46） *Ibid.*, t. I, p. 96.
（47） *Ibid.*, t. I, p. 189. 訳，（上）149頁。
（48） *Ibid.*, t. I, p. 185. 訳，（上）145頁。
（49） *Ibid.*, t. I, p. 179. 訳，（上）140頁。

民主主義的思想の防波堤[50]」の役割を果たしたものである。「総合的な教育」の主張は，世俗・無償・義務の公教育体系創出の主張であったとみることができる。もうひとつは，ブランキ自身の活動であろう。意識的主体の創出のためには欺かれないための備えだけでは十分ではない。「攻撃はこの二つの不正の砦（無知と貧困）に同時に開かれ，続行されなければならない[51]」というブランキの言は，無知の絶滅のための公教育と，社会問題の糾弾を通してのブランキ自身の大衆啓蒙活動が同時に行なわれなければならないと読むことができよう。先に見たとおり，二月革命時のブランキの課題は普通選挙までの大衆啓蒙にあったのである。

しかし，ここにひとつの矛盾がある。「共産主義なき教育の一般化と教育の一般化なき共産主義は，ともに同じく不可能なことである[52]」という主張である。これは，ブランキが現実の問題として教育の普及即共産主義社会の到来といった短絡的な図式を描いてはいないことを示唆している。「科学的社会主義に対するブランキの最大の貢献は国家論である[53]」というガロディの評価を待つまでもなく，ブランキは，ブルジョワ支配下の公教育，すなわち「共産主義なき教育」に期待をもっていたわけではない。しかし，教育が公教育でもある以上，共産主義と並行して歩むことはいかにして可能なのか。ブランキにとって教育が，階級闘争の，「労働者の共和国」建設の意識的主体の創出という課題を負っていたことを確認すれば，その答はあらかじめ与えられている。政治権力の奪取による「労働者の共和国」の建設である。つまり，いま共産主義という言葉を社会体制として受けとるならば，それは二つの意味において使用されている。教育を全面的に普及させる体制としての共産主義社会と，歴史の究極にある真の共産主義社会である。そして，この第一の共産主義社会を彼は独裁期と呼ぶだろう。ブランキは独裁期の具体的見取図についてはほとんど触れていないが，真の共産主義社会がかなたの地平にあるかぎり，絶えざる変革，永続革命という性格をもつものだろう。彼は言う。「社会組織は，ひとりあるいは何人かの事業ではないし，誠意や献身，さらには才能による事業でもありえない。即興ではありえないのだ。それは，時間，模索，漸進的経験による，知られざる，自発的な潮流によるすべての人間の事業である[54]。」革命成立前の教育が上からの啓蒙という性格をもっているとすれば，この独裁期の教育は，それとともに，諸個人の自己教育という意味が込められていることが，ここから推察される。エゴイズムからの脱却を人間の知の進歩と捉えていたブランキにとって，歴史を動かす意識的主体に賭けていたものは，革命成立後のこの時期の諸個人の自己教育のあり方だったと言ってもよいであろう。

注（50）梅根悟監修『世界教育史体系10・フランス教育史II』（講談社，1975年），87頁。

（51）*C. S.*, t. II, p. 41.

（52）*Ibid.*, t. I, p. 178. 訳，（上）139頁。

（53）Roger Garaudy, *Les sources françaises du socialisme scientifique*, (Paris, 1948), p. 258. 平田清明訳，（ミネルヴァ書房，1958年），408頁。

（54）*C. S.*, t. II, p. 115.

第三節　政治革命優位の論理——社会革命批判をめぐって——

近代フランス社会主義を政治革命（権力の奪取）と社会革命（産業の協同化）という二潮流からなるひとつの総体と捉えるとすれば[55]，ブランキは徹底した政治革命の道を歩んだ思想家である。階級闘争論を基軸に据えた政治権力奪取が彼の革命思想の根幹である。それゆえ，たとえば，「共産制（communauté）とは部分的な諸協同体を次々に連合し，徐々に形成される国全体の総合的協同体（association intégrale）であるにすぎない[56]」という主張の中に，プルードン主義の直接的な影響を見て，社会変革の手段，戦術として労働者協同体（association）や協同組合（coopératif, coopération）が捉えられていたと考えるのは早計であろう。たしかに，彼の歴史観によれば協同体の発展は共産主義的革新であり，歴史の方向ではあるが，協同体の発展の中に革命の契機があるわけではなかった。革命が階級意識をもった労働者階級による政治権力奪取である以上，協同体の発展は革命的意識を昂揚させるうえで有効だったとしても，それ自体が革命の戦術となっていたわけではない。また，ブランキは，その「資本」批判において「資本」対「労働」の階級闘争の理念，労働者のヘゲモニーという理念を獲得したが，その経済分析は専ら流通の側面に依っていた。プルードンの社会革命が「集合力（force collective）」概念から導出されるとすれば，ブランキは，生産過程に分析のメスを入れない以上，社会革命の必要性を認めたとしても，それを支える「労働の協同体」という理念を自らのものとすることはできなかったと言えよう。彼の共和国は，労働者の協同体ではあっても労働の協同体ではなかった。

本節では，以下，同時代の労働運動や社会主義思想に対するブランキ自身の批判を見ながら，その政治革命優位の論理をたどり，彼の革命思想の特質に触れてみたい。

まず，ブランキの協同組合批判から見てゆくことにしよう。1860年以後，「自由帝政」の労働者懐柔政策の下で再び活性化した労働運動を，ブランキは「ストライキと協同組合」という二方向（労働運動における政治革命と社会革命）において捉え[57]，協同組合批判の立場を明確にしている。批判は理念と戦術の双方の面から加えられる。

ブランキにとって，協同組合は，その理念において個人主義に根ざすものであり，「総合的アソシアシオン」に向かうようなものではなかった。それは個人の救済というエゴイズムを本質とする[58]「数字の王国[59]」である。その運営は，「配当金，利子といったまったくの公的経済学のメカニズム[60]」

注（55）この点については，野地，前掲論文，参照。
（56）*Ibid.*, t. I, p. 210. 訳，（上）167頁。
（57）*Ibid.*, t. II, pp. 166-167. 訳，（上）200頁。
（58）*Ibid.*, t. II, p. 135.
（59）*Ibid.*, t. II, p. 130.
（60）*Ibid.*, t. II, p. 138.

において行なわれるのであり，資本主義の枠内に留まるという結果しかもたらしはしない。さらに，「協同組織（associations）が広まると，参加の形式が自由であれば，弱者，病人，未熟練は除外されて，熟練，健康，頑強な者しか入ることが許されないのは明白である。前者は，大きな仕事の機会にしか雇傭を見いだせず，失業の日々と死の季節（mortes saisons）には労働なしですごすであろう。部分的な協同組織はエゴイズムの強烈な表明でしかなく，社会悪の増大しかもたらさないことの新しい証拠である。」[61] 協同組合の成功とは，ブランキには，単に階級分化が進行することを意味するにすぎなかった。「エゴイストは巧みに窮地を脱して飢えた群から分かれ，強欲で功利的で情のないブルジョワ階級という第二の階級と今からすでに見分けのつきかねる第三の階級を形成する。」[62] 協同組合は，まさに革命の敵として彼には映る。それは，労働者の革命意識を昂揚させるどころか，胃の腑を満たすことに労働者の関心を向けさせ，「大衆を支配し，その革命的傾向を麻痺させる，新しい，さらに巧妙な手段」[63] として権力に利用されているのだと彼は考える。「協同組合という言葉は反動という言葉と一体である。」[64]

このようなブランキの批判が完全な妥当性を持つとは言えないにしても，その批判の視座は重要である。ブランキは，現実の労働運動の主体の利害ではなく，労働者階級全体の利害の上に立って革命を展望している。批判の根幹は，個別的利害と全体的利害の乖離にあった。つまり，ブランキにおける革命の主体は，現実の労働運動の主体それ自体の中にただちに見いだされうるようなものではなく，階級全体の利害の上に立ち，階級全体と運命を共にする階級意識，革命意識こそが主体たる必須要件だったと言うべきだろう。さらに，ここから正義による革命という彼の理念を確認することができる。彼は貧困に直接革命の根拠を置いたのではなかった。つまり，貧困からの解放という効用に訴えたのではなかった。現在貧困と無知の状態におかれている「すべてのものの創造主」である労働者階級が，ヘゲモニーを握らなければならないという正義に訴えたのである。もし貧困からの解放を彼が言うとしたら，それはあくまで労働者階級全体の解放でなければならないと主張するだろう。個人的救済の道は，彼にとっては，それ自体労働者階級と対立する要素をもっていると意識されていたのである。

次に，ブランキは，仮に協同組合，協同組織が連合の理念をもち，普遍的協同体をめざすものであったとしても，現段階における戦術としてはそれは無効であると批判する。「大きな協同体が彼ら（労働者）のわずかばかりの金を取り上げてしまったら，いったい何をもって彼らは小さな協同体の資本を構成することができようか。」[65]「人民は，大きな組織（société），つまり国家の推進力によ

注 (61) *Ibid.*, t. II, p. 271.
(62) *Ibid.*, t. II, p. 136.
(63) *Ibid.*, t. II, p. 132.
(64) *Ibid.*, t. II, p. 130.
(65) *Ibid.*, t. II, p. 153. 訳，(上) 193頁。

ってしか隷従から逃れることはできない。」[66] 国家予算の膨大な額に比べれば，協同組合によって形成される社会資本など全く取るに足らないものであり，政府がブルジョワの利害を貫徹する以上，小さな組織によって全体的な社会変革を試みることは妄想でしかない，とブランキは考える。この批判が，第一インターナショナルのプルードン主義者に直接向けられたものであることはいうまでもない。「それ（第一インター）は宣言する。労働者は，政府の協力なしに，政府の枠外で，そしていかなる政府の下でも解放を勝ちとることができる，と。政府自らがインターナショナルを禁ずることで，この主張の愚かしさを示すのを引き受けてくれた。さらば，夢と妄想よ！」[67]

ブランキの社会革命批判，政治革命優位の論理が，階級国家観に基づく全体的変革の主張であることはもはや明らかであろう。ブルジョワ政府を打倒し，労働者のヘゲモニーを樹立すること，これこそがあらゆる変革の前提だった。この視点から同時代の他の社会主義者に批判の矢が向けられる。サン－シモン主義者は，クレディ・モビリエ（Crédit Mobilier）の創設や鉄道建設等，まさに「地球」的規模での社会変革を射程に入れていたが[68]，ブランキの目からすれば，彼らは「第二帝政の柱」[69]，ブルジョワ国家のイデオローグであり，もはや社会主義者ではない。フーリエ主義者，カベ主義者，プルードン主義者の運動は，全体的展望なき局地主義として斥けられ，また非行動主義として弾劾される。「共産主義（カベ主義，フーリエ主義）とプルードン主義は，大河の岸に立って，向う岸がとうもろこし畑か小麦畑かを決めるために執念深く相争っている。彼らは障害を越える前に問題を解決することに固執する。――ああ！　まず渡ろう！　われわれはそこで見るのだ！」[70]

こうした政治革命優位の論理は，その階級闘争論の必然的帰結であるとともに，巨大な国家機構と遅れた資本主義をもった近代フランスの現実の反映でもあろう[71]。もちろん，それは，それ自体としても，また社会革命批判の武器としても意味あるものであったがために生命力を保持しえたのであるが，階級国家観への固執は，彼に，市民社会を国家から自立したものではなく，それに従属したものと認識させた。たしかに，彼の言う諸協同体の連合とは，政治権力奪取後の社会革命の構想であるには違いないが，だとすれば，政治革命前の現実の諸協同体への徹底した批判との関係が問題となってくるはずである。ブランキは，社会革命の視点を，したがって政治革命と社会革命を統合する視点をついに発見できなかったというべきだろう。

注（66）*Ibid.*, t. II, p. 157. 訳，（上）195頁。

（67）*Ibid.*, t. II, p. 174.

（68）サン-シモン主義者は，1830年『地球（Le Globe）』紙を買収し，これを通じて教義の宣伝に努めている。なお，第二帝政期におけるサン-シモン主義者の多岐にわたる経済活動については，たとえば，Jean Walch, "Les saint-simoniens et les grandes entreprises au XIXe siècle," *Economies et sociétés*, Tom. IV, No. 10, (Genève, 1970) に簡潔にまとめられている。

（69）*C. S.* t. I, p. 200. 訳，（上）158頁。

（70）*Ibid.*, t. II, p. 314.

（71）この点は，拙稿，前掲「オーギュスト・ブランキの革命思想」参照。

第四節　革命の主体——「デクラセ」概念の再検討——

ブランキの革命思想は，三つの柱，つまり，「武装蜂起組織による権力奪取，全人民の武装，革命独裁」から成り立っていると，加藤晴康氏は指摘している。[72] いま，この見解を踏まえて，ブランキの「革命」を時系列で追えば，革命の準備期間，革命の瞬間，革命成立後の独裁期間という三つの段階に区分することができる。本節では，本稿全体を総括する意味で，主体の問題をめぐって各段階を具体的に考察することにしよう。

まず準備期間について。ブランキは，労働者階級が革命の主体でなければならないという理念を保持していたが，それは，ただちに労働者階級が革命の主体であること，あるいはそうありうることを意味するものではなかった。自らの災禍の源泉を知らず，階級意識をもたぬ労働者階級には，革命の前段階において教育が必要だった。そして，その教育は，総合的な公教育，階級意識覚醒のための啓蒙という二つの面をもっていた。この後者の教育において教える立場にあったものは，ブランキその人であり，彼の武装組織であった。

では，この組織の主体は何かと問えば，ブランキは「デクラセ」であると答える。つまり，「知性ある賤民」[73]である。彼らこそ「進歩の見えざる武器であり，今日大衆をひそかにふくらませ，彼らが衰弱の中に沈んでゆくのを防いでいる秘密の酵母菌」であり，「革命の予備軍となろう」[74]とブランキは言う。この「デクラセ」は，果たしてブルジョワ階級からの「階級落伍者」と捉えるべきだろうか。たしかにブランキは，元国民公会議員の父と高名な経済学者の兄をもつ自らの出自をブルジョワと明言し，「プロレタリア陣営の中のブルジョワ」の積極的な役割を認めている。[75] しかし，ここから直ちに，ブランキの武装組織の主体を「階級落伍化」したブルジョワ知識人とするのは早計であろう。「四季協会」，「中央共和協会」の会員構成は先に見た通りであるし，リトレの辞書[76]によれば，「デクラセ」は「自己の階級の外に除外されたもの（Oté hors de sa classe)」であり，これを「落伍者」と捉えることは一面的ではなかろうか。

ブランキのテクストそのものの分析から，「デクラセ」概念を検討しよう。『社会批判』の中に déclassés, déclassement という言葉は11回でてくる。そのうち，二箇所を除いて他はすべてイタリック表記である。例外は，引用文中の déclassés[77] と，次の箇所である。「彼らは金をもてば déclassés であることをやめ，第一級の地位に昇る。[78]」これはまさに「落伍者」を意味するものであろう。し

注（72）加藤晴康「解説」,『革命論集』下巻，198頁。
（73）*C. S.*, t. I, p. 219. 訳，(上) 174頁。
（74）*Ibid.*, t. I, pp. 219-220. 訳，(上) 175頁。
（75）"Lettre à Maillard," *O. C.*, t. I, p. 356. 訳，(上) 91頁。
（76）Émile Littré, *Dictionnaire de la langue française (édition intégrale)*, (Paris, 1956).
（77）*C. S.*, t. II, p. 355. なお，*C. S.*, t. I, p. 227の引用文中に形容詞の déclassée がある。
（78）*Ibid.*, t. I, p. 219. 訳，(上) 174頁。

かし，イタリック表記の他の箇所をみると，別のイメージが浮かび上がってくる。以下，主要な部分を引用してみよう。「*déclassés* に対する戦争は，クーデタ以後，教師（instituteurs）と非宗教学校に対する容赦のない排斥の一致した叫びだった。(79)」「パリにおける公開集会で，*déclassés* に対しクーデタによる誹謗の言葉があえて吐かれた。賢者の社会は生き延びることができない，むしろ愚者の社会を選ぶべきだという言葉があえて吐かれた。国民が無知によって奴隷となっているのに，教育のある人間が多すぎると嘆くのは，人民の敵の言葉ではないか。(80)」「ジェズイットの修道院に取って代わられる至るところの学校（collèges），野獣のように追いたてられる教師（instituteurs），*déclassement* に対する，すなわち貧者の教育に対する呪い，教理問答に堕した初等教育，リセにおける哲学の廃棄と研究の分離というよりは絞殺(81)」「政府談話，新聞，説教は，競って人民の子弟には教理問答とひとつの職業だけを教えるべきであり，その他のすべての教育は叛乱の永久の源泉，公共の災禍であると公言する。至るところで，大衆の欲望をかきたて彼らを社会に向かわせる教育に対して冒瀆的な言葉が荒れ狂い，すべての社会秩序の敵，騒乱の扇動者たる *déclassés* に向けて呪いの嵐が浴びせられる。(82)」「今日，民衆集会の中においてまで，*déclassement* への攻撃，無償義務教育への戦争が再びしかけられるのを見るとき，社会主義の偽仮面の下に，聖職－封建の陰謀を見抜くのはむずかしいことではない。職業学校（*écoles professionnelles*）計画を深く研究してみれば，1852年の悪意，労働者をひとつの職業の中に閉じ込め，かくしてカースト制度へ立ち戻ろうとする牢固たる思想を再び容易に見いだすだろう。(83)」

ここに見る限り，問題となっているのは，ブルジョワからの「階級落伍」ではない。労働者に対する世俗・無償・義務の「総合的な教育」の主張という文脈の中で，「デクラセ」，「デクラスマン」は語られている。ここでは「デクラスマン」は教育と同義であり，「デクラセ」は教育を受けた者を指している。ブランキが，労働者階級の状態を無知と貧困と捉えていたことを考えれば，「デクラセ」とは，教育を受けることによって，そのうちの無知から抜け出したもの，階級のおかれた一般的状態から離脱したものである。(84) つまり，自らの災禍の源泉を知り，階級意識に目覚めた労働者，革命の主体たる労働者を，ブランキは「デクラセ」という言葉で理念化したと考えられるのである。

注（79） *Ibid.*, t. I, p. 179. 訳，（上）139～140頁。
（80） *Ibid.*, t. I, p. 213. 訳，（上）170頁。
（81） *Ibid.*, t. I, p. 216. 訳，（上）172頁。
（82） *Ibid.*, t. I, p. 218. 訳，（上）173頁。
（83） *Ibid.* 訳，（上）173～174頁。
（84） ブランキ研究の第一人者ドマンジェは，デクラセを「教師（instituteurs）とすぐれた初等教育によって教養を身につけた労働者」と推論している。(Dommanget, *Les idées politiques et sociales d'Auguste Blanqui*, p. 240.) また，スピッツァーも，ブランキが，デクラセという言葉を落伍化した知的ブルジョワと比較的程度の高い教育を受けた労働者の二つの意味で使っていることを指摘している。(Spitzer, *op. cit.*, p. 164.) ブランキ自身が多くを語っていない以上極論することはできないにしても，こうした見解を一歩越えて，無知から離脱した労働者とのみ解釈することは，これまで本稿で検討してきたブランキの革命思想の構造からおしても十分可能であると考える。むしろ，そう解釈することによってブランキの革命思想はより体系的に把握されるだろう。

とすれば，彼の武装組織は少数の知識人より成る閉鎖的な集団ではない。自らの階級意識を自覚したすべての労働者に開かれたものである。少なくとも彼の理念においては，そうであった。かくして，この組織の会員の任務は，第一に，労働者一般への啓蒙の普及による組織の拡大であり，第二に，来たるべき革命に備えての武装準備となる。

次に，来たるべき革命の瞬間をブランキがどう捉えていたかを考察することにしよう。まず，ブランキが革命を少数者の蜂起として考えていなかったことは，彼の歴史観から容易に推察しうる。人間の知の漸進的な進歩が社会発展の基礎であるとしたら，革命は少数者の気まぐれの蜂起によって成就しうるものではない。「革命でさえ，急激な様相を呈するものの，蛹が殻を破るということにすぎない。革命はいま破られた殻の中でゆっくりと大きくなったものだ。」[85] 二月革命期，3月17日，4月16日の民衆デモの時も，5月15日の民衆デモ議会侵入事件の時も，ブランキは武装蜂起を行なわなかった。彼は「大衆が議会を倒すつもりのないことをよく知っていた。」[86] 彼にとって革命は少数者の武装蜂起ではなく，殻の中で醸成された階級意識の爆発としての労働者大衆の自然発生的蜂起だった。これは，ブランキが「武装蜂起教範」を六月蜂起の敗北から始めていることからもわかる。「一方に，無秩序の中におかれた政府と士気喪失した軍隊，他方にたち上がるすべての労働者とほとんど確実な成功。どうして彼らが敗北したのか。組織の欠如の故である。彼らの敗北を検討するためには，彼らの戦略を分析しなければならない。」[87] 彼は「万を数えるばらばらの人間」が「行き当たりばったりに，無秩序に，協力など考えもせずに，各自が自分の隅っこで自分の気紛れにしたがって行動する」[88] ことこそが六月蜂起の敗因であるとし，その場に居合わせることのできなかった革命家[89]たる自分自身の義務が「彼らを同一の目的に向かって協力させ，孤立していては無力にすぎない諸特質に実を結ばせる」[90] ことであったと述べている。革命の瞬間における革命家の役割は，もはや扇動者ではなく，純粋な技術者として意識されている。この意味で，全人民武装蜂起という理念は1830年以来一貫していたと言えよう。つまり，彼にとって革命の主体は，技術者たる革命家やその組織ではなく，蜂起する労働者一般の側にあった。

このように考えた時，彼の言う独裁が，少数者の独裁を意味するものでないことは明らかであろう。ブランキはこの独裁期の権力構造についてはほとんど何も語っていないが，独裁が革命を成立させた主体の独裁である以上，それは武装組織による少数者の独裁ではありえないはずである。独裁の必要は，「資本」による反革命の阻止と，パリに対する地方の啓蒙にあった。パリで起こった

注 (85) *C. S.*, t. I, p. 41. 訳，(上) 127頁。
(86) "Défense de Blanqui au procès de Bourges (avril 1849)," *O. C.*, p. 302.
(87) "Instruction pour une prise d'armes (1868)," *Textes choisis*, p. 214. 訳，(下) 10頁。
(88) *Ibid.*, p. 220. 訳，(下) 16頁。
(89) ブランキは，5月15日事件で逮捕されている。
(90) "Instruction pour une prise d'armes (1868)," *Textes choisis*, p. 218. 訳，(下) 14頁。

革命を守り全フランスに浸透させること，これが緊急の課題であり，彼が「パリ独裁」[91]と呼んだことは，革命の主体となったパリ労働者全体の独裁を意味していると考えられよう。そして「デクラセ」が開かれた概念だったことを考えれば，この独裁の主体もまた労働者階級全体に開かれたものであろう。ブランキが，少数者への権力集中とイデオロギーの強制を極力排除しようとしたことは，ロベスピエール批判[92]にも明らかであるし，「共産主義は，政令によって強制されるようなものではまったくない，それは国民の自由な決意によって達成されるべきである」[93]という言葉にも表われている。何よりもまず，彼が社会の組織化を「すべての人間の事業」と捉えていたことを忘れてはなるまい。彼は，「正義」を保障しうる独裁体制の下で，国民の自由意志，絶えざる自己教育によって，社会的には諸協同体の漸次的連合によって，共産主義社会への道が開かれることを期待したのだった。

以上の検討から，ブランキにとって革命の主体が「開かれた」ものであったことは明らかであろう。「デクラセ」は，現実にはパリの戦闘的労働者を想定して作られた概念であろうが，それは労働者階級全体に開かれた概念であり，「デクラセ」を他の労働者と分ける指標はその階級意識にあった。労働者としての階級意識をもち，労働者階級全体の利害の上に立って未来を展望し，革命行動に主体的に関わってゆく労働者を，「労働者の共和国」建設の主体たりうる労働者を，ブランキは「デクラセ」という言葉で理念化したのである。そして，革命の主体を労働者階級全体に開かれたものとして措定することによって，彼は，労働者階級全体の利害を政治的に貫徹する視点をもちえたのである。それは，労働者政党も合法的労働組合もない十九世紀中葉のフランスにおいて成立した未成熟な思想ではあった。彼は「デクラセ」概念の現実的基盤であったパリ労働者に主体としての期待をもっていたにも拘らず，専ら正義に訴えることで，彼らの日常的意識を革命へと向かわせる回路を整備するには至っていないし，政治権力奪取を当面の最大の課題とする意識にあっては，独裁期の政治構造，社会構造は体系化されず，きわめて曖昧なもののままに残されている。しかし，初期社会主義を研究することに意義があるとすれば，そのひとつは初期であるがゆえの本質をそこに見いだすからであろう。ブランキの思想もまた，未成熟なものであるがゆえに，本質的な問題を内包しているといえよう。後年，社会主義そのものが近代化される過程で，党や組合がそれ自体の論理をもって，閉ざされ，階級と離反する可能性をもっていることをわれわれは知っている。ブランキの「開かれた」思想が，現代においてどのように再生されるべきものかは今後の課題として，少なくとも，彼を「過去の世代の革命家」として葬り去ることはできないことを，ここに確認したい。

（慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程）

注 (91) *C. S.*, t. I, p. 206. 訳，(上) 164頁。
(92) cf. "Notes inédites sur Robespierre (1850)," *O. C.*, pp. 310-326. 訳，(上) 105～120頁。
(93) *C. S.*, t. I, p. 208. 訳，(上) 165頁。